

210
1.

正徳二年 表卷之二

詳ありて事接ゆなり
と世に下り稀あり

○十二月朝鮮人來聘

正徳自蘇任統副使東瀛令世瀛
從事青丘其床 張殿本抄云々

十四

武江年表卷之二 畢

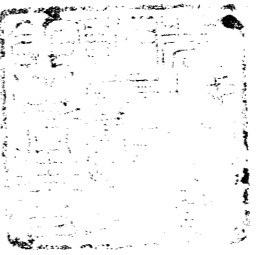
武江年表

二

五六
八

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 7

210
2



武江年表巻之二

寛永十三年丁丑 二月閏

二月天海傳正志願^{しげん}ふより切經^{きりきやう}二子巻を刊行せしむる^{しやう}
 三月^{しんげつ}天海傳正志願^{しげん}ふより切經^{きりきやう}二子巻を刊行せしむる^{しやう}
 四月^{しがつ}天海傳正志願^{しげん}ふより切經^{きりきやう}二子巻を刊行せしむる^{しやう}
 五月^{ごがつ}天海傳正志願^{しげん}ふより切經^{きりきやう}二子巻を刊行せしむる^{しやう}
 六月^{ろくにんげつ}天海傳正志願^{しげん}ふより切經^{きりきやう}二子巻を刊行せしむる^{しやう}
 七月^{しちがつ}八月^{はちがつ}星月を夢く^{ゆめ}
 八月^{はちがつ}肥後^{ひご}の^のあまふ^{あまふ}の^のあまふ^{あまふ}の^のあまふ^{あまふ}
 九月^{くがつ}肥後^{ひご}の^のあまふ^{あまふ}の^のあまふ^{あまふ}の^のあまふ^{あまふ}
 十月^{じゅうがつ}肥後^{ひご}の^のあまふ^{あまふ}の^のあまふ^{あまふ}の^のあまふ^{あまふ}
 十一月^{じゅういちがつ}肥後^{ひご}の^のあまふ^{あまふ}の^のあまふ^{あまふ}の^のあまふ^{あまふ}
 十二月^{じゅうにがつ}肥後^{ひご}の^のあまふ^{あまふ}の^のあまふ^{あまふ}の^のあまふ^{あまふ}

寛永十三年丁丑

一

○東光山初編と神田書齋より漢書抄録の編

○十二月品川小参松山と東海と清刺立 松山は
菴和尙

○今年以来書團の首を極一ありて云

寛永十六年 己卯 十一月四日

駿府清徳書院番へ命せしむ

○吉田為吉の家刻 松山貞養系尚書家あり
ふは親書をさめたりうり

同十七年 庚辰

二月日光山廿五圓清神志了却修行有○二月より八月末まで
天下牛多く死に○松原河東屋小参つてせし海舟方系也
りしは寛永九年 十六 男名一の意地ありて今年二月同席細野と
り意地を極一とせし同月それの日を定めて命せし清徳書院番

○松原河東屋小参つてせし海舟方系也
りしは寛永九年 十六 男名一の意地ありて今年二月同席細野と
り意地を極一とせし同月それの日を定めて命せし清徳書院番

○寛永十六年 己卯 十一月四日
駿府清徳書院番へ命せしむ
○吉田為吉の家刻 松山貞養系尚書家あり
ふは親書をさめたりうり
○今年以来書團の首を極一ありて云
○東光山初編と神田書齋より漢書抄録の編
○十二月品川小参松山と東海と清刺立 松山は
菴和尙
○今年以来書團の首を極一ありて云
○東光山初編と神田書齋より漢書抄録の編

夕暮を惜ごどもまへ本のつらうを必し一巻を海鏡の月 以巻

寛永十八年 辛巳

正月廿九日夜横町よりおん登海日暮へくけく獲る町松平七町武家
く二百字形殺廢を以ての大いんとはのそへ

○此夜至國二百七十巻成松 林道春はまき藤倫士おまひ
丑山の傍に修撰あり

○東叡山五大師院へ巡行執事奉り 上野五條六社社へ満天神

を合祭す ○柏村田野等も某師堂某日為法再建

○二橋村を齋通町と号す 二橋村あり又改
てお川町とす ○白根寺と標田とあり

福さる ○青松も貝塚とあり 室中へ福さる

○七月 長命ありて 經由は生ま子権現縁起撰述あり 繪の持性

至馬の著あり ○秋葉敷梅子形不熟 ○八月朔日大風松十艘の石

船形川沖ふ沈む 後流人この西を根と号し漁籠り毒ありと云一浪おきり
十一月
八月朔日仲夏は松平川より大石を獲りしは松沈没す一松を根と
号す

○八月仲夏田圃東賞寺に仁王とる像を立 賢徳代徳と及如
室海と人とあり

○北へ海相松平行 二浦津
心也

同十九年 壬午 九月間

正月朔日大雪 ○二月大雪 ○二月十九日以後至七焼亡 は松村市
とりりのお終り

○二月十三日大雪 を脚く焚捨るのふ流書ふは既ありれ
あふいそ他はけいふのふありのまあり

○二月より七月おあり天下大肌腫米價貴躍一死人多しは救米

續をぬさる ○八月諸候参勤交代始る

○夏越中伝尋公出下向あり八月朔向は降洛の日慶唐師一室要と

是かふ事曉る あつさ ○二十二間堂始る 基三人形お留町
は降後天海傍

○正月はつらん人の法を替古の為降洛に二十二のま造堂あり ま志新お付傍の撰書あり

後後橋 今皇後橋あり寛文
との國小もあつたせう 二ごころぬ 今の所川
ああり

以上寺院の号町名文字詳あつたれり系事不極く後字のまふ記に

○江戸繪圖梓引する事ハ實永永始り一あや其ころの世の世ふ

終りて此時代の國と南の世と橋とせり此路のあはは橋端鞠町の

入に沼池を流りぬり小川町新田川流を橋を流りぬり大川を流り

て載る所の方城按一番渡り橋の圖 實永永始りの事ハ其ころ

○世上通用の書籍の記引一一書終り終りぬり書し事ハ其ころ

始りて見えたり女子の一書と書わたり事ハ其ころあつたり

ありとあへ 本海傍箱系
あつたり

○本村孫十郎言致る續武が因後と按る實永永の末ふはためて

あまはらるる枝竹といふのを引ふ是よりあまのには田長門す

始り製は葛藤と稱ふ一その事番の徳と和具を本條條小入を

番條とせり必かりてせをたつと

○薩摩小車 京及根の毒
或記の序と云 江戸より申橋小車より採る事を具行を

海山先生向陽後辨の二子を流りて其の世と云ふ事ハ其ころ

の集事ありと云ふ事ハ其ころ声曲歌集集りし事ハ其ころ

○東海合考小澤獨唱

後院後院人形と云ふ事ハ實永永事ハ後退りて東大板よりり

しものこと

○花澤踊りひんぐり あまの片橋をどりつる小唄行 長崎女所院と
りつる小唄もこの
時代より 貴族勢をさふひ椿花を弄る事ハ其ころ

あまのあまといひせせる親世とあまひか春うらみ
さんあまの羽衣をさるるうけり用ひるるるにせり

○申島浮雲といふの江戸あま未紀旅を創り始り

○春甚獨語も云實永永の頃風俗男の事草のうらみ草の務りを

